

第7回（平成24年度第5回）札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

24.11.26 札幌文化芸術円卓会議事務局

【伏島委員長】

お手元に、「平成23年度・24年度札幌文化芸術円卓会議からのメッセージ素案」がある。今日はこれについて議論したい。その前に、今日御欠席の斎藤委員から、メッセージが届いているので、事務局に朗読して欲しい。

【事務局】

（斎藤委員からのメッセージを読み上げる。）

【伏島委員長】

斎藤委員がこの場にお出でになると、補足というかさらに深いお話しを聞くことが出来ると思うのだが、大変ありがたいと思う。

それでは、自由に御発言いただきたい。

【漆委員】

素案の中身に関しては、このようになっていけば良いと、今までの議論を踏まえて素直に思う。

これがどのような形になっていくかによって円卓会議の役割も見えてくるだろう。これは素案ということだが、行政の方でもアートセンターの構想は進められているのだろう。次の円卓会議に向けても、良いたたき台が出来たと思う。

この素案を市長へ届けるということか。

【伏島委員長】

これまでの議論のエッセンスが、円卓会議からのメッセージだととらえている。この素案は、みなさんの意見の中から、エッセンス、キーワードを抜いて、一つの文章に落とし込んだつもりだ。しかし、抜けているものもあるかもしれないし、余分なこともあるかもしれない。そこは、みなさんの厳しい眼で議論して欲しい。

【漆委員】

この中にも触れられているとは思っているのだが、あえて加えていただきたいと思うのは、市内には民間施設でも、公共施設でも、ギャラリーにしろ、シアターにしろ、すでにある。あるものはあるもので活かして行ければよい。あ

くまでも、中間支援的なものとしてアートセンターがあるということ、もう少し強調してもよいかなと思う。この素案の中には、アートセンターが果たさなければならない役割が詰まっているような感じがするが、アートセンターだけでできることも実際には限界があると思う。

素案に書いてあるネットワーク機能に含まれるのかもと思うが、中間支援的な機能をアートセンターが主体的に果たすということ、札幌にいる人材を浮かび上がらせる機関がアートセンターであるということをもう少し強調されても良いのではないかなと思う。

アートセンターができることに、すごく期待することは結構なことだと思うのだが、アートセンターができることによって、自分たちがもう少し頑張らなければいけないという、そういう起爆剤になればよいと思う。競争意識が出てくるというのか、アートセンターに頼らずに、横の連携をつくって、アートセンターを活かしてやろうというものになっていくといいかなと思う。そのあたりが、書き方は難しいかもしれないが、あると良いかなと思う。

【伏島委員長】

アートセンターについては、市が設置した検討委員会の中で、すでに4つの機能が強調されている。そのひとつとして、まさに中間支援機能を持つべきであるとしっかり書かれている。そこをもう少し強調してもよいかなと思う。書き方だが。

【漆委員】

美術館なら、つくった箱、ハードを活かすということをもっと考えなければならぬ。アートセンターができてアートセンターだけに人が行ってもしょうがないなと言う気がする。アートセンターがあることによって、他の箱なり、活動へ人が流れて行く、アートセンターがあることによって、個々の活動がきちんと広報されていくとか、そんなイメージを僕は持っている。

【伏島委員長】

確かに、書き足りない気もする。例えばショーケースという言葉は出てくるし、情報にも触れているのだが、コンサルティング機能を持つとまでは、ここには書かれていない。「どうしたら良いのだろう、それじゃアートセンターへ相談に行こうか」ということがあれば良い。

【伊藤副委員長】

若手の作家がいたり、表現者がいても、サポートが何も無い。場所もない、

お金もないで、大体は、学生で全国的な賞を取っても、コールセンターで働いているというように、札幌には実力のある若手が多いという言い方をするのだけれど、実際にはサポートが何も無い。

演劇の場合も、大変だという話だった。そこをどうするかという話だ。

美術だったら場所かもしれない。ちょっとした助成金、助成金とは言っても、とりあえず作品を作るのに必要なのは、10万円くらいなものだ。ちゃんとしたジャッジで、責任もってやらせる方がまだ良い。そういうものが入ると良いと思っている。

入れられるのなら、アートセンターにも入れたいと思っているのだが、札幌市の文化行政の中で、そこをやっていく部局が別に立ちあがっているのか、立ちあがっていないのか。例えば、芸術祭実行委員会とか、芸術文化財団とか、いろいろあるが、もしないのなら、ここに入れてしまう方が良い。

【漆委員】

その制度的なものとか枠組みがあると、アーティストが育つということと同時に、企画をする方の立場、僕らはコーディネーションと言っているのだが、アーティストが活躍できる土壌を作るひとたちに対しての、ある種のサポートもあってよい。

例えば、アーティスト・イン・スクールというものを企画し、そこでアーティストに活躍してもらいたいというように、活躍の場を作る人たちもいる。ただの仲介ではなくて。

アーティストが活躍する一歩手前の企画の部分を、きちんと設計できたり誘導できたりする人たちに対しても、サポートできるしくみ、これはアートセンターがやるのか、行政がやるのかちょっと分からないが、そういったことも必要かなと言う気がしている。その厚みがでてこない、アーティストが場がない、金がない、時間がない、結局止めてしまうことにつながりかねないと思う。作家ばかり増えてもしょうがないし、観る側ばかり増えてもしょうがないという感じもあって、その辺りの、今まで余り日の目を見なかった部分とか、ある種のボランティアでやっていたところに対して、きちんと職業化していくというのか、産業化していくというのか、そういうところにスポットライトを当てて行くという作業は、アートセンターでもなければできないことかなと思う。それが、大手なり、中小なりの広告代理店がやっていることとは一線を画した文化活動の担い手を育てることになるのかなと思う。

【伏島委員長】

企画をする。その中には仕事をつくるという企画もあり得る。ちょうど、斎藤歩さんのメッセージにあるのは、我々は、メセナをアート関係の中だけで考えてしまうのだが、彼はそうではない。もっと大きな枠組みがあってよいだろうと。例えば、全国的な企業になった道内企業が、コマーシャルフィルム（CF）をつくるときに、こんな風にCFを作ったらどうですかというように。すばらしい、映像作家、音楽家、写真家が、私の頭の中だけでも出てくる。

【漆委員】

ある種のビジネスモデルをつくる必要性があるのかなという気もしている。コンサートの企画等にも近いものがあるだろう。意外と、美術シーンではそのようなものが弱い。

【伏島委員長】

もちろん、大手の広告代理店と連携することもあるかもしれない。しかし、今は丸投げではないか。

そうではなくて、札幌の素材を活かして、みんなで作りませんかというような、プレゼンテーションをしていく。その場に、端からその企業にも入ってもらおう。

これは、全国どこでもやっていない。

もしかすると、北海道でひとつのビジネスモデルを作れるかもしれない。

【漆委員】

多分、アーティストの表現活動という一つの企画と、それを下支えする枠組みとしての企画とで見え方が大分違うと思う。枠組みとしての企画が事業化できるチャンスがあって、アーティストの表現活動を、ビジネスライクにやるというのは別の話になっちゃうのだけれど。その手前にある受け皿となる企画について。例えば、オペラのコンサートを札幌のいろいろな箱をつかって、おもしろおかしく企画したとする。それとオペラはまた別物だと思う。その手前にある企画について機能させられる人たちとか団体とか、そういうところといっしょに事業化していくことをいっしょに考えたりとか、そういうことが、もうちょっと市ぐるみでというか、もう少し札幌としてできるようになるといいなと思う。

【伏島委員長】

私は、しっかりと一元化していかなければいけないと思う。市は市でしっかりとやっている。財団は財団でやっている。企業メセナはメセナで、と言う部分はある程度結集させて、仕事のある部分をアートセンターに統括してしまう。

だから、ここに行けば、市の助成も財団が行っている仕事も一目で観ることが出来る。そういう本当に役に立つアートセンター。そうすると若い人が個人の足でぐるぐる回らなくても、とりあえずそこに行くと、話が見えてくる。そのような部署はあるようでない。

【漆委員】

だから、言い方は悪いが縦割りの状況の中で、たらい回しに合うこともあるだろう。圧倒的に札幌って素材としていろいろなものがある、やられているのだが、お互いにどنگりの背比べになっていて、連携しようという気持ちはさらさらしない。横断しようとする奴もいないし、出来る人もいないし、そういう組織もない。じゃ、もっと道外とか国外とかに出かけて行って、それぞれが本当に、専門性をもってがんがんやっているのだったら、もっとにぎやかなはずなのだが、そこまでもない。とりあえず市民の人が来てくれれば良いな、だから、だいたいお客さんを取り合っている。だったら横断しなければいけないと思う。個々にハイレベルなところで争えないのだったら、横断して、きちんと情報も集約しつつ、ある枠組みとしての企画をきちんと回せる人達に対して、きちんと助成なりサポートなり、ノウハウを培ってもらって集約していく。そういうところが増えてくれれば別だと思うが。

【伏島委員長】

ワンストップサービスのものは、意外とないので、前向きにぜひとらえていただきたい。

【事務局】

いろいろな芸術施設とか、いろいろな文化関係の団体とか、意外とその間の連携というか話し合う場がないということが、今のお話しの中でも出ていたと思う。アートセンターをつくったときにアートセンターが中心となって、そういう場を作っていかなければならないと、文化部内部でも思っている。

いろいろなホールの協議会とか、いろいろな文化関係の団体の協議会とか、あるいは、美術、演劇、音楽、写真いろいろあるが、それらを横断するような機会がない、音楽の中でも、クラシックやジャズ、邦楽等交流する機会、話し合う機会を作っていく必要があるのかなと思う。

【伏島委員長】

じゃ目的は何なのかと言われたときに、総花的にいうのではなく、やる気のある若手をサポートすることに中心を置くとか、それをはっきりさせた方が良いと私は思うのだが。

【伊藤副委員長】

競争させなければだめだ。委員長のおっしゃるようにワンストップで相談を受けられるということも必要だ。相談を受ければ、落とし所、交通整理ができる。若手のサポートで言えば、若手をもっと、海外へ出してやらなければならぬのだが、助成金自体の原資がなくなっている。

ICC が今の場所から移ると、今まで入っていた若手は、家賃の支払いができないので入れなくなる。そういう場所ももうなくなる。札幌市が何となく、インキュベーションということで持っていたものが、もうなくなる。

おそらく、国際芸術祭のような事業を行う時に、1点突破でお金をつかっていくということになるから、ますます細かいところを絞らざるをえなくなるということが現実として有ると思う。

そういうときに、どういうことができるのかということが一つある。

そのときに、問題なのは、公募して競わせないとだめだということだ。今、情報を持っていてお金を持っている子はある。ただ、本当は伸びるのになと言子になかなか情報が回らない。そこはどんどん情報を回して競争させるということが一つだ。結局東京でも、世界でも最後はプロポーザルで競争になる。その力をつけることが必要かなと思う。

それと、これは難しい話になるのだが、さきほど委員長からお話しのあったコマーシャルをつくるとか、いろいろな作家や、アーティスト、パフォーマーの人たちを組み合わせるとするのは当然あるべきだと思うが、もうひとつ、ビジネスモデルを作ると言った時に、芸術領域そのものの考え方から来るビジネスモデルもある。例えば、音楽家がこういうことを考えた。美術作家がこういうことを考えたということが、結果的にはこれまで商売になっていない、聞いたことの無い話なので、それをみんなでちゃんとスタッフを組んでやってみたら、大きなモデルになったというパターン、今までにないモデルがある。

プレビエンナーレの実行委員会なんかで、ちょっと疑問に思ったことがあって、みなさん芸術祭やりたいという気持ちがあるから、成功させなければいけないといったときに、ちゃんとメディアに取り上げられたり市民に周知されないといけないから、マーケティングを最初にやってしまう。そのためには、例えば、大通公園に子どもが1,000人くらい集まるようなイベントを

やっただけいいのではないかという話になる。そういうことをやってくれるアーティストはいないかという話になる。これは逆だと思う。芸術の趣向というのは、美術作家とか写真家とか、あるいは音楽家がいて、観客は1人でもいいんだというのも、それはそれで一つのコンセプトだし、1万人集めなければできませんよというのも、それはそれで一つのコンセプトだ。そこからモデルができてくるのだが、どうもモデルが先にある。

形にならないようなものがあるときに、それをどこがやるのかということがある。おそらくPMFも最初はそうだったような気がするし、モエシもそう。そういうビッグネームが来たときにはそうなるが、どういう風につくるのかを扱う、相談できる窓口は、実際は何もない。本当はそういうことを含めて、芸術から、文化からビジネスモデルをつくる。先にあるビジネスモデルに落とし込むのではなくて、それができたらいいなと個人的には思っている。

【伏島委員長】

ビジネスモデルは、新しい開発そのものだ。そういう実験もやっていく。まあ、哲学的には地産地消的な。札幌から育てて行くコンサドーレのようなモデルも考えても良い。

【伊藤副委員長】

この間から「アーツ千代田 3331」の話がでてきているが、あれをやっている「コマンド A」、中村政人さんが「コマンド N」をやっていたのだが、3331を回すために作った組織だ。入っている人間はみんなアーティストだ。中村さんが、自分の組織でやっていた社会的な美術活動を、箱が大きくなったので「コマンド A」を作ったのだが、基本的にあれは美術活動だ。場所をつくるという美術活動を行っているのであって、いわゆる指定管理者とは微妙に違う。貸しビルやっているわけではないので。ああいう発想がでてきたときに、どこが受皿になるのかということだ。できた建物とか、展示とか、施設に関しては分かりやすいので、ああいうのがあったら良いと思うが、やっぱり、あの人アーティストだからできたということだ。

【井出委員】

今まで、経験してきたことをいかに発展させていけば良いのか。私達は、アーティストとして、オペラをいかに広めるかということを考えるだけで、本当に村社会でやっているような状況だと痛切に感じる。

ただ、村社会でやっていることも悪いことではないので、それをいかに広げていくか。私達のようなアーティストとお客様の媒介となる、企画・コー

ディネーターが、今非常に少ないと思う。音楽の世界では、少なすぎるかなと感じている。

コーディネーターを育成するアートセンターが出来る前に、私達ができることもあるのではないか。

それには、若い人が動かなければいけない。ひょっとしたら、今までアーティストとして行ってきた人の中にも、自分はアーティストではなく制作の方が向いているという人が出てくるかもしれない。

私達は、自分たちで歌って、自分たちで制作して村社会を作ってきたが、それは無理だとこの 20 年で感じた。村だからできたこともあるが、それを産業化するためには、もう一ついろいろな方々のお知恵を拝借しなければならない。謙虚に受け止めなければならないと、円卓会議に参加させていただいてすごく感じたことだ。

【伏島委員長】

井出さんたちだけではなくて、あらゆる分野の人たちが、自分たちは札幌の地場産業の一つであるという意識はまずないだろう。

それを、地場産業のひとつでもある、地場産業のひとつになっていくということを考えた時に、そういうことだったら、そちら（制作・マネジメント）の方の仕事をしたいと考える若者がでてくる可能性がある。

【井出委員】

いろいろな助成金をいただいて、ヨーロッパへいくというように、才能のある子は伸ばさなければならない。世界を見せなければいけないという環境づくりと、また、自分が今までやってきたことをいかに、次の世代に引き継いでもらうかという環境づくりが今非常に必要だと思う。アートセンターを機に。

【伏島委員長】

企業だけではなく、一市民でもサポートする人がでてくる可能性がある。今、リタイアした人だって、5 万円や 10 万円なら何とかできるという人がいるかもしれないし。みんなで、あと 10 万円だして勉強に行かせるというようなことが始まったら楽しみだ。

【井出委員】

私も、かつて、助成金をいただいて、ヨーロッパにオペラ研修に行かせていただいた。その当時、日本では、オペラは原語上演ではなく日本語上演が

主流で、全部日本語に置き換えて演奏されていた。何十年も昔のことですが。歌舞伎に型があるようにオペラの型をオペラ発祥の地で勉強できるような若者たちへ環境づくりが大切であり、必要だと思います。

【伊藤副委員長】

言われていることはよくわかるが、今、大学でも留学生が少ない状況になっている。危機的だ。自分の街より外に興味がなくなっている。ある程度、インターネットで情報は入っているのだが、本当に出なくなっている。完全に守りになっている。

井出さんに質問があるのだが、オペラの実制作過程ではいろいろな業務があると思うが、お金のことは別にして、札幌で上演するとすれば、十分の数のスタッフ、技術者がいるのか。その人材は薄いのか。

【井出委員】

人材不足です

【伊藤副委員長】

調査していて、フィラデルフィア市の劇団が結構シビアだと思った。教育を施すとき、100人のダンサーがいるのだが、この中で成功する者は2人しかいないという。そこそこ頑張っても、地域の劇団やダンサーをやっている人も30過ぎたらもう無理だと言われる。

だから、常に逃げ道はないので、その後どうするか考えろということが教育の中身に入っていて、だから手に技術者の職をつけないといけないのだという考え方を持っていることが重要だと思った。

つまり、全員が成功できるわけではない。ほとんどは悲惨な道をたどる。そのときに、今度は応援するファン、応援団になるというのが普通なのだが、舞台には立てないが、舞台を支えて行きたい、オペラだったり、パフォーミングアーツといっしょに暮らしていきたいという子は、技術者になっている。

パフォーミングアートをやる人は、その後の人生設計を考えて行かなければならない。それには、手に技術をつける。技術を身につければ、ボランティアになるか、パートタイムになるかは分からないが、自分の仕事とともに、常に参加できる場所があるという考え方をしている。

僕らが受けた美術教育はそのようなことがなくて、アーティストになるか、やめるかみたいな形だった。

そのあと、どういうふうにして技術者として、あるいはアドミニストレーション（管理・運営者）として寄り添っていくか、寄り添うのは年をとってから

でもできる。そのようなシステムがないなという気がする。

職業訓練みたいなものが必要なのか必要でないのかということも含めて、もし必要であれば、それに対して助成することがあってもよいと思う。

【漆委員】

それは、大賛成だ。

【井出委員】

総合芸術といわれているオペラとなると、すごくいろいろなスタッフが必要になってくる。音楽をトレーニングするひと、演技をトレーニングする人、原語ディクシオン(発語)指導する人、現場を制作運営する人たち。

しかし人材が少ない。なぜならば生活していけないから……。

そのような状況の中でも、「さっぽろオペラ祭」では各団体がコミュニケーションを取りあって活動している。全国的にも珍しいことだと思う。…がしかしさらに産業化して広げて行くためには、宣伝・企画運営アートマネジメントする人材が育ってほしい。

【伏島委員長】

全部自分のところで、一式持っているのは劇団四季くらいだろう。非常にまれなビジネスモデルだ。なかなかそうはいかない。

【井出委員】

何年か前に劇団四季を見て、そのときは自分の中で受け入れられないものがあった。札幌劇場が完成し「ライオンキング」を観る機会があり、カルチャーショックを受けた。すごいレベルだった。決して安いチケットではないのに、完売になっているビジネスモデルは凄いと思う。

【伏島委員長】

たまたま新聞で、スタッフも紹介していたが、スタッフもすごい、育っているということが良く分かる。

【井出委員】

劇団四季は産業化されている

【伊藤副委員長】

あれは、イギリス人やアメリカ人が得意なシステム化だと思う。

【荒川委員】

札幌市で、さぼーとほっと基金がある。私どももそれを利用したことがあるが、企業から札幌市にかなり高額寄付があって、それをこちらに助成してもらったことがある。

実際、このような便利な助成金があるので、それを文化に活かさないかなと思う。その寄付の後、実際にその企業の方と面談し、太鼓連合会は、イベントをつくりたい、人に観てもらいたい機会が欲しいという話をしたら、その企業が行う大倉山のイベントに参加してくれとか、太鼓連合会でイベントを行うのなら、札幌市を通してだがお金を出しますよという話に結びついた。

【事務局】

さっぽろサポート基金は、企業が寄付するときに、使い道を指定する方法、団体指定もある。これは市民まちづくり局が行っている。

【伏島委員長】

たとえば、アートセンターに窓口があって、さぼーとほっと基金のしくみを説明するとか。企業でも、50周年記念で支援したいのだが、どこへ行けばよいのか、何を支援してよいのか分からないというときに、あそこに行けば紹介してもらえるとというような場所があれば良い。

【伊藤副委員長】

いろいろな助成金があるが、あちこち回らないと分からないとか、ずっと通っていると教えてもらえるとか、これが一番まずい。

実際持ち込まれる寄付の申し出や、助成金の制度概要などをフラットに閲覧できる場所がないとまずい気がする。

【荒川委員】

「文化芸術施策を充実し、国の基本政策に据えることに関する請願」が、国会で通ったようだ。これを踏まえて、アートセンターのことも考えた方がよいと思う。自民党、民主党等超党派の議員が出した請願のようなので、動きがあると思う。

【伏島委員長】

もちろん視野にいれなければならない部分だと思う。このような請願や、劇場法、国の文化行政に対する動きにどう対応するか、このような役割は、

プロとしての市長部局の仕事だと思うが、どうか。

【事務局】

国の動きをとらえて、議論していかなければならないと考えている。

【漆委員】

アートセンターの機能として、分野を越えたかかわりのなかで、政策提言ができるが一番良いと思うのだが。例えば、僕らの分野だと教育に関わるコーディネーターが全国から集まって議論して、議論した中身を内閣府に政策提言したこともあった。

それには、誰かが横断して話を聞いたり、集約しなければならないのだが、そういうことも役割として必要なんだろうと思う。

例えば、毎年一回会議を開いて、どんなことを市や国に対して要求していくのか、それを集約できるような機会をアートセンターが設ければ良い。

いろいろなところを横断的にネットワークできる機関があれば、一ジャンルの誰誰が言っているのではなくて、札幌市の芸術文化の全体としてこのような提言が上がっているということであれば、それなりの説得力になるのだろうと思う。その辺を文化部と協働できるのであれば、良いかなと思う。

【伏島委員長】

きちんと情報収集し、分析するシンクタンク機能、そこでは政策提言までも良いわけだから、そういったことをどこかで書き込んだ方がよりよいのかなと思っている。

だから、今の荒川さんと漆さんのお話を組み入れて、政策研究機能をシンクタンクという言葉に置き換えて書いてみようかなと思っている。

【浅野委員】

素案がよくできていて、きちんとまとめていただいている。芸術の産業化がひとつの論点になっているし、地産地消という言葉も出ているが、札幌の産業はありそうでない。その中で、芸術でやっていくのは良いことだと思う。たまたまかかわっている東川町は、農業の街だったのをあえて、写真の町宣言をすることによって、今がある。

芸術の街さっぽろというのも、札幌のイメージにきちり合っている。ここを第一に考えていくべきではないかと思う。ある面閉塞した時代の中で、生き残っていくキーワードのひとつになっていくのは間違いないと思う。現状としてどうかということ、産業として成り立つレベルのものは非常に少ない

ということは間違いないし、そのための人材もないというのは今までさんざん議論してきたことだ。

今までのお話しをうかがいながら思っていたのだが、市としても、いろいろなイベントごとだとか、いろいろなものを頼むときは、どうしても競争入札とかプロポーザルをやるときでも、広告代理店がかかわってくるというか、関わらざるを得ない現状は間違いなくあると思う。

その部分をきちんとしていかないと、アートセンターができた、どうしましようといったときに、最終的にアートセンターも指定管理になるのだろうか。指定管理ができるところが受注するということにならないように、きっちりと考えて行かないと、厳しくなるのではないかなと感じた。

ICC、モエシ沼、芸術文化財団が指定管理を行っている施設のように、アートセンターもその一施設と同じようにならないシステムをきちっとつくっていかなければ、ただ、新しいもう一つの組織ができるだけで、それではだめだと思う。

行政の縦割りは、言葉としては簡単だが、ギャラリーを借りようと思っても、芸術文化財団それぞれの箱に行って、空いてなければ、また別にいつていうことを繰り返している。それが、一カ所でできるようになれば簡単だし、まずそういったところから始めて行くということも、大事ではないかなと思う。

例えば、アートステージがあって、ビエンナーレがあって、市民芸術祭があって、バラバラに動いているのを、なかなか一つにまとめるのは難しいのだが、そこをきっちり整理していかないと、同じようなものをつくることにならないようにしていかなければと思う。

【伏島委員長】

これは指定管理者制度になじまないとか、みんなで協働してやるものだという事など、コンセプトになるものは書かなければならないと思う。芸術文化財団との関係など整理しなければならぬ問題はいろいろある。

【漆委員】

今の想定では指定管理か。

【事務局】

まだ、何も決まっていない。

【伏島委員長】

マンパワーとお金の面で、市の負担を増やさない方法だってあるわけだと思うので。

【浅野委員】

産業化と言う部分で考えたのだが、フィルムコミッションがある。あそこは、映画を取りたいというときに、いろいろ関連する分野を紹介する。

例えば、イベントごとがある場合に、アートセンターが、歌はこの人、太鼓はこの人というように回せることができるようになればいいのだろうと思う。

ビジネスモデルとして成り立ってくるのではないか。今、広告代理店が、自分のところの仕事に対して、カメラマンは誰、デザイナーは誰というようにしているが、そこをもう少しきちんと整理出来ればよい。

【伏島委員長】

アートセンターが、フィルムコミッション的なお世話をやるとすれば、市の人たちだけではできないので、民間の有償ボランティア的な人がそこに入っていか、今日、決めることはできないが、そのようなことも視野に入れて。

【浅野委員】

昔は、それぞれの地域に篤志家がいる、アーティストを地方に呼んで、アーティストを抱えてということがあったと思う。

さぽーととほっと基金の目的指定にアートという分野があったら、60代、70代の今お金のある方、篤志家をうまく集められるような組織になっていけば、それがすごく理想的なのかなと思う。免税措置も含めて。

【伏島委員長】

できれば、文化関係の部分だけでも、アートセンターへ移管してもらえれば、非常に分かりやすくなるのだが。

【浅野委員】

文化関係でも、独自に動いているところがあるので、難しいところがあるのだが、特定のところだけにならないようにできればよいのだが。

【伏島委員長】

この円卓会議では、村ということばをはっきり使って、村をばらすという

よりは、村の横の連携というか、お互いをしっかり見合うみたいなそこまではしっかりやっ払いこうというところでは、進化があったと思う。

【田中委員】

現場の中で感じたことを話したい。札幌へ来て、1年半になる。若い人たちの情熱、熱意を感じるようになった。何か、前と違って活気づいている、それはどこへいっても感じる。それぞれの芸術と言われる分野、オペラ、ミュージカル、演劇、邦楽もそうだ。写真、さっぽろは、何でもあるのだが、それぞれが小さな村になっていて、横の連携だけではなくて、それぞれの分野が切磋琢磨できることが必要だと感じる。例えば、札幌劇場祭に参加していない、名の知れぬ小さな劇団にもけっこう良いのがある。そういうのを拾い上げて行くのも一つだ。北海道二期会は、歌はすばらしいが型が古いと思う。

劇団四季のようにカンパニーとしての組織があって、外国のものもどんどん取り入れるというのなら良いのだが、さっぽろは、村意識が強くて、そこから脱しなくても良いのだと思っている。そのようなことを感じる。

なるべくなら、もっと切磋琢磨するということと、東京が良いという意味ではなくて、もっと違ったものを取り入れようという気持ちがあるということが大事だと思う。

そうすると、なんだこんなふうにはできるのかということもあると思うし、こだわりは芸術家として必要だと思うが、余りにもこだわりすぎると脱せないことがあるのではないか。

今の若い人に感じることは、外へ向かって眼を開かない。経済の疲弊で夢も希望も持てないということも確かにあるのだが、身近なところで収まりたいという意欲がすごく強い。だから、異次元の中で身近な「初音ミク」のようなものにひかれるとか、内に入って、手近に変身できるものを望んでいる。

団塊の世代は、外へ向かって何でも吸収しようという意欲にあふれていた世代だ。それが、若い人たちには余りない。だからこじんまりしていて、良いのだが太刀打ちできない。そこを、何とか変えたいと思う。

それが、悪いわけではなくて、日本のアニメなどはフランスでも受け入れられている。日本の文化として悪くないのだが、そこにいままで、私達が培ってきたものもプラスして新しいものが作れたら、きっと、若い人はもっとわくわくして、いきいきできて、それが札幌発ということであれば、独創的なアイデアになると思う。札幌と言う街が、空気が良くて、おいしい食べ物がたくさんあって、こんなに都心に緑がたくさんあって、すごく住み心地が良い。

だけど、表向きは非常に国際的なのだが、一歩中に入ると意外と村意識が強い。それを打破すると、また違った札幌、産業化と結びついたときには、また全然違う方向性が見えるのではないかとすごく感じる。

アートセンターがせっかくできるのだから、総合的にうまく運ぶように、若い人がもっとわくわく、生き生きできるようにして欲しいなと思う。

【伏島委員長】

まさに、アートセンターの仕事は何かと言うことに関する一つの意見だ。

私は、美術村、演劇村、ときには俳句村に行ったりしている。ほとんど完璧な村だ、これでは元気がでないなと思う。

【田中委員】

札幌交響楽団は素晴らしいと思う。また、海外で賞をとってお帰りになった方々もやはり素晴らしいと思う。これらは宝だと思う。

北海道二期会は、正当的な歌い方なのに、所作や衣装、舞台セット等が昭和30年代のようで古い気がする。

【伊藤副委員長】

美術なんかも、学生を見てみると、昔と違ってほらをふかないから、堅実なんだが、生活に外がない。今のような時代、民間が動けないので、行政が新しいものを持ってきて見せる。少なくとも、それをサポートする形になっていないと、もう全然回らない。

残念なのは、本当に見せなければならない行政、われわれプロの方も、これ人が入らないと困るよね、数字を出せと言われていいるときに、新しいものではなくて、やはり東山魁夷でやりましょうとか、レオナルド藤田でやりましょうという、別にデパートでもやれるじゃないという安定路線になっていく。そうすると学生の方も、どこで観ても同じものになってしまう。その役割を我々大人が果たせていないということだと思う。

だから、どのように先鋭的なものにアップデートできるか、企画も、お金もそうでしょうし、人事もそうだろうし、どんどん古くなっている。

【伏島委員長】

私は坩堝という言葉を使いたい。例えば、舞台芸術をつくるときに、日本の古典だって知っていなければ、良い舞台は作れない。良い音楽、それはクラシックだけではない、いろいろなものを経験していなければ、良い芝居なんて絶対できない。

そういった意味では、若い人たちがすぐに劇団をつくる。それはそれで良

いのだが、その先に行かなくて終わってしまうのは、そのような仕込みというか、殴り合いと言うか、坩堝の中でお互いに煮えたぎる瞬間がないので、ああ楽しかったね、青春のひとこまで終わってしまう。すごく中には優秀なやつもいるのだけれど。そのとき、まさにわれわれ大人のする仕事ってあると思う。

そのような坩堝的なものが、北1西1にできたら、札幌新のシステムとしては、かなり画期的なものになると思う。

だから、斎藤歩さんも、そういう芸術監督が必要だねということで、オーケーしてくれると思うのだが。

【野田委員】

メッセージ素案を読んで、こういうことを議論してきたのだなとあらためて思った。

全部出来たらよいと思うが、全部は一度にできないと思うので、中間支援機能を大々的に出すとか、伊藤さんがおっしゃっていたように、助成は若い人メインでというような方向性をここで出すことによって、札幌の文化が90度変化する、とまでは言わないが、少なからず変化させることが出来ると思っている。いまあるものを活かして、アートセンターを挟んで、新しいものができてきたという進み方があると思うので。さしあたって、今回の第2期の円卓会議では、こういった方向を示すのが良いのではないかな。

【伏島委員長】

若い人を育てる、中間支援をきちっと行うというところに踏み込もうか。そこに力を入れた方が伝わる。今の市長が行っていることともつながる。

【漆委員】

多分、これは、理想形というか、こういうことができれば良い、そのためには、まずこういうところからきちんと着手していかなければいけないのではないかとということが次に来ると良くて、若い芸術家であり、コーディネーターであり、そういった人たちにきちんとした仕事ができる環境をつくる。お金もそうかもしれないし、ネットワークをつくることでもある。情報発信ということでもある。

【伏島委員長】

今の趣旨を、メッセージの終わりの前に書いてみる。

【本家委員】

私も、アートセンターがこうなったらよいなという意見を出したが、今あるギャラリー等の施設がどうなっていくのかという不安が大きくなってきた。

伊藤さんがおっしゃったように、東山魁夷やレオナルド藤田とか大きな展覧会をやれば、それなりに人は多いが、それ以外では、ちょっとした画廊とかでやっているものは、全然人がいない。その中で、アートセンターができれば、そちらへ人は行くと思うが、そうなったときに、小さなところが、どうなっていくのかというのが凄く不安に感じた。

アートセンターが出来る前に、色々な話し合いが出来ればよい。アートセンターだけではなく、それぞれの区にある建物についても、話し合える場をつくっていければよい。箱の中に何をつくるのかではなくて、箱そのものをアートとして見ていけたら良い。

私も、この会議に参加する前は、絵にしか興味がなかったが、井出さんのところのオペラとか見させていただいて、こんなに楽しいものなのかと思った。

一般の人は、オペラとか聞くだけで、難しいとか私の入る場所ではないと思ってしまうので、アーティストが自主規制とか妥協しない程度で、難しいものをもう少し簡単に入れる、それが低料金だったり、ワークショップみたいな、門をあげなくても入れる場所でやればよい。チカホのように通り過ぎたらやっていたという感じでやれたら良い。

アートの分野も料理の分野と同じだなと思うのだが、例えば、北海道の人は、サケならチャンチャン焼き以外の料理方法を知らない、それを中華風にアレンジするとか、フランス流にアレンジするとか、北海道はせっかく良い素材があるので、ほかのところからそれを上手く調理できる人をもうちょっと入れたらよいなと思った。

【田中委員】

オペラが、学校教育の中でプログラムに入っていたら、もっと違う展開がある。教育が一番大事な土台だと思う。小学生の段階から、演劇そのものの難しいことをやるのではなくて、もっと初歩的なパントマイムでも、何か一つのテーマで演じることで何でもよいので、自分で感動するということが教育の中である程度浸透していたら、オペラに誘ったら、多分もっと手を上げると思う。

【井出委員】

毎年小学校にボランティアでアウトリーチをおこなっている。「ヘンゼルとグレーテル」を読み聞かせと BGM の流れる中で紙芝居、その途中に歌のア

ンサンプルを何曲か 1 時間弱の演奏プログラムは、いつも子どもたちが熱心に興味を持って観てくれる。このようなアウトリーチ企画が、演奏会場に来られない子どもたちの現場へ行って生の音楽を演奏し、読み聞かせをするという音楽の種まきをたくさんできると良いと思う。

【伊藤副委員長】

いま、おっしゃったことがとても大切だと思う。これから、もっと状況は悪くなる。たとえば、土日に、お父さんやお母さんが、オペラや現代美術の展覧会でなくてもよいのだが、子どもたちを、ただで連れていける文化的な場所があるかということ、どんどんなくなっているような気がする。

センターがあれば、周辺もあるということだから、地域にそのような場所があるということが凄く大切なことだ。

地域の図書館も、ほとんどは高校生の勉強の場所になっている。

【伏島委員長】

本家さんの心配にあった、アートセンターが 1 人勝ちになってしまうと、小さなところは困るのではないかということだが、私は逆に考えている。

小さなところをもっとうまく回るようにサポートするような場所、例えば、ギャラリーの情報は、新聞の催しもの欄ではよく分からなくて、ギャラリーに行かなければ分からない。そのことは、私がギャラリー通いをしているから分かることであって、ほとんどの人は知らない。

音楽の世界もそうだ。まさに、ショーケース的に、簡単に分かりやすく紹介する機能、それができれば、各区のセンターともケーブルでつなげたい。

今、とりあえずアートセンターを整備して、それができたら、ギャラリーなどのモールでもいいから、映像化して見られるようになればいいかなと考えている。

学校教育とのからみでは、アートセンターが直接お世話をするというよりも、ワンストップサービスのよう、何かやりたいという先生がいたら、アーティストを紹介するとか、そういう口利き屋みたいなことがここでできると、いろいろな人たちが、あそこで来てよかったねということになればいいかなと。

そして、敷居の高い、低いということがすごく出ていた。敷居を低くする仕事もアートセンターの仕事の一つだと思う。そこで、5 分か 10 分の軽いワークショップで簡単に体験できるとか。

書の先生、コンテンポラリーダンスの先生など、いろいろいるわけだから、アートセンターへ来て、体験させてあげるといような、そんなことも展開

できる。

【野田委員】

アートセンターには、ホールやギャラリーをつけるという話もあったと思うが、ただ、予約を入れれば使えるような施設になってしまったのでは、それこそ、1人勝ちになってしまうと思う。

【伏島委員長】

貸館ではないですよ、ここは。まさに企画センターだと思う。

【野田委員】

しっかりした方向付けがないと、結局ここに集まってきてしまうと思う。

【伊藤副委員長】

なかなか手がつけられないのだが、リストラしかないと思う。ここは無駄だということ、どうしてこのような仕事が残っているのかということがある。ここは手薄らしいということも含めて。リストラは減らすということではなく、リストラチャリング（再構築）ということで、そういう形でつくっていかないと、どうしても原資がないわけだから。

【井出委員】

いろいろな面で企画運営できる、コーディネーターが必要である。

【伏島委員長】

アートセンターをつくるということを、市が良い機会にしていだけたら良いということが、ひそかに思っていることだ。

【伊藤副委員長】

これをきちんとやろうと思ったら、専任 10 人はいないと無理だろう。その 10 人をどこから集めてくるのか。

今ある施設から人を取るという意味ではなくて、この機能はアートセンターに人ごと移管してもらおうということは、有りではないかと思う。

【浅野委員】

今ある財団を有効に使わない手はないのではないか。

【伊藤副委員長】

まずは、仕事を作ってほしい。

美術は分かりやすい。今、ほとんど小中学校の美術の教員としては、若い人を探っていない。どんどん非常勤、要するにアメリカ型になっている。

履修は必修だが、教員は非常勤というかなりゆがんだ形になっている。

地域でワークショップをやるとか、夏休みに何かやるといったときに、音楽家とか作家の若い人たちを雇ってほしい。パートタイムでかまわないから。

その人たちが、そういう現場へ行って、子どもたちを教えたり、その人たちも教えることによって社会性が身につく。

【事務局】

地域でいろいろなイベントがある、そのなかにもっともっとアート系の取組があっても良いのかなということだ。

白石駅の前の広場をつくるときに、地域の中学生がレンガを積み上げて、レリーフを作る取組を行った。そういうアートの取組で、地域のまちづくりをするとか、病院の中でアートの取組をするとか、アパートの中の一室で、高齢者が自分たちの手作りの展覧会を集まってやってみたりとか。

地域、地域のそれぞれの場所でもうちょっとアートのまちづくり、取組を展開するときに、アートコーディネーターが入って行って、お手伝いするみたいな、そんなしくみをアートセンターがコーディネートできたら良いのかなという感じがする。

【伊藤副委員長】

本当に市があるスタッフを組んで、斎藤さんでも漆さんでもいいし、現実にはできるコーディネーターと契約して、就任してもらって、それは会社でもよい、プロフェッショナルが何人か入って、市も入って回していくというのが理想的だ。

【伏島委員長】

それは、地場産業の一つだ。

【事務局】

アートの産業化は、結局、まちづくりの中に、もっとアートの部分を入れて行くというのが、これからの方向性でないかなと。まちづくりの中にアートの部分をいれて行って、いろいろなアーティストとかコーディネーターを派遣して行って、そういう形で仕事を作っていくこともできるのではな

いか。

【井出委員】

それは、とても大切で、若い人たちにとって、現場を踏ませるということが貴重な文化の種まきだと思う。

【浅野委員】

さっき、伊藤さんからお話があった、若い人が先が見えない中で、アート産業を企業するときの助成金を使って、商店の空き店舗をまちづくりと兼ねてやっていくとか、システムが行政としてきちんとできれば。

【事務局】

アーティストの集積をつくっていくというのは、アートセンターの大きな仕事だと思っている。

【浅野委員】

空き店舗しかないところにカフェができたり、雑貨屋ができたりとか。そこに、地場のアーティストの作品が扱われるとか。

そういうふうに、行政として支援できる部分をきちんとできれば、多分話だけではなくてくるのではないか。

【伏島委員長】

その意味では、中間的な支援では、いっぱい仕事がある。

大分また、見えてきた。

それを、どういう仕事があるのかを具体的に落とし込んでいく。

【事務局】

アートに、もっと生活の中で触れる機会とか、まちづくりだとか、医療とか福祉の現場とか、町内会の会合に行ってもらうとか、何かアートをもっと生活の中に浸透させる、そういう方向で、アーティストとかコーディネーターの方が活躍できる場を、もっともっとつくっていければよい。

【浅野委員】

情報が出ているようで、きちんと届いていない。伝わりきれていない部分がある。市の文化部のサイトを見ると助成金とかけっこういろいろな情報は出ているのだが、みんなに知り得ていない。そういうところをもう少しま

く発信していくことが大事ではないか。

【伏島委員長】

文化庁の支援のしくみも毎年変わっていくわけだから、文化庁の支援の情報をできれば解説付きで、提供できれば良い。このように書いてあるけれども、本来の目的はこうだということまで。

素人でも分かる言葉で解説することが大切だ。

助成金の情報もそうだろうし、いろいろなアート情報だって、たくさんあるなかで、何を選んで良いのか、素人は分からない。多少偏りはあるかもしれないけれど、私としては、これがお勧めだという一言が必要だ。

それが、まさにアートソムリエだ。

【伏島委員長】

今日いただいた、意見を踏まえて、素案はまた改良したい。それをみなさんに投げ返して、また御意見をいただきたい。

【事務局】

円卓会議の実質的な議論は、今回で終了となる。このあと、文化芸術基本計画の検討委員会との合同会議の中で、さらに内容を深めたものを伏島委員長から御報告いただき、意見交換するということになる。

第8回目は、市長との懇談ということになる。日時については調整中なので、決まり次第ご連絡したい。

【伏島委員長】

大きな変更にはならないが、もう少し力点をおくとか、これからどうするかということが、絶対必要だと思うので、今日のみなさんのニュアンスを克明に描くことはできないが、力点を置いて表現していきたいと思う。そのあたりは、できれば一任していただいて、ペーパーベースにはなってしまうが、皆さんにお返ししたい。

子どもへの芸術体験、主に若者への中間支援にはきちんと踏み込みたいと思う。